

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 3 号

平成 14 年 7 月 24 日

小西芳之助「主の御名を呼ぶ」より（4）

神学者を恐れるな

神学者は、聖書そのものよりも、神学を勉強する。キリストを信仰することは、神の言葉なる聖書だけから来る。それで、無学の凡人でも、聖書によって、キリストを信じることができる。この故に、聖書の勉強にまさる大切なことはない。聖書は聖霊によって書かれた。だから、大神学者といえども、聖霊の導きなくして、聖書を解することはできない。

聖書の正しい理解を与えるものは、聖霊である。我らに聖霊を与えたまえ。さらば、我らは神学者を恐れる必要はない。

かつて、内村先生は「我々日本人は、キリスト教の勉強にケンブリッジやオックスフォードに行く必要はない。キリスト教はキリストである。我々は、日本にありて、キリストを信じ、キリスト教の最も深い真理を悟ることができる」といわれた。

（昭和 39 年 7 月）

人生の目的

人生の目的は、仕事を沢山することではなくして、彼が我らに欲し給うことをすることである。我らは、しばしば、神が欲し給わない偉大なことをなさんと欲する。そして、それができない時に不平を言い、他人がそれをした時に羨ましがらる。

マタイ伝 11章 29, 30節にいわく、「わたしは柔和で心のへりくだったものであるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と。

毎日、神の我らに欲することをなそうではないか。神のくびきをとり、神の荷をになおうではないか。すると、神は、我らの魂に休みを与え、かつ、人生の真の意味を教えて下さるであろう。

(昭和39年8月9日)

私の先生

パウロは、「私は、それを（福音を）人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである」と言った（ガラテヤ書1章12節）。しかし、私は福音をイエス・キリストと父なる神から、内村鑑三先生を通して受けた。大正10年に先生が、ロマ書3章21 - 26節を説教なさるのを聞いた時であった。もし、私が、内村先生から福音を聞かなかったなら、福音を信じなかったであろう。

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ロマ書10章17節）はまことに真実である。神は人を用い給う。

（昭和40年12月）

最も恵まれた者

今から丁度20年前、1946年5月19日、私の妻は、41歳で、2人の息子と1人の小さな娘を残して、癌で亡くなった。死の2日前、彼女は、家族を呼んでこう言った。「もうすぐ私は天国へ召されるでしょう。私は、あなた達をそこで待っています。お父さんに従って、あなた方のなすべき事をやりなさい。イエス様を信じて、私の所へいらっしゃい」と。

私は、彼女を最も恵まれた者の一人であったと思う。なぜなら、彼女は、天国へ行くということを信じていた。このことは、私の若い頃に暗記した次の言葉を思い出させる。

「この世には、天国が癒し得ない悲しみは存在しない」。(ヨハネ伝14章1 - 3節参照)(5月8日 母の日)

(昭和41年6月)

最も偉大なる人々

或人いわく、「善い生涯は、最も偉大なる行為である」と。最も偉大なる人は誰か。私が思うに、この最も偉大なる行為をなす人であると。誰がこれをなし得るか。私が思うに、死に打ち勝つことができる人である。そのわけは、死に打ち勝つことのできる人だけが、善く生きることができるから。

ペテロとヨハネは無学のただ人であったが、死をもっておどされた場合でも、自分のなすべきことをなして、善く生きることができた。それは、彼らは死に勝つ力を持っていたからである。彼らはどうしてその力を得たか。イエスの福音を信じて、我が主イエスの名を呼んでその力を得た。

神は、現在もまた、誰でも、イエスの福音を信じて、わが主イエスよと言うことによって、ペテロ、ヨハネの如き人となし得る。

ペテロ、ヨハネの如き者として頂こうではないか。

(昭和42年11月21日)

汝の如く隣人を愛せよ

大抵のクリスチャンは、自分を愛するように隣人を愛することは不可能だと思う。しかし、私は、そうは思わない。

それは、私が思うに、かつ、聖霊により確信するが、自分の如く隣人を愛するということは、福音を信じ、我が主イエスの名を呼んで、毎日、目の前の義務を尽くすことに他ならないから。

(昭和43年1月)

平成12年4月22日(土)に、小西芳之助先生召天20周年記念会が、本郷の学士会分館で開かれた際、私はスピーチの原稿を用意しておりましたが、時間が足りなくなって、話すことができませんでした。今も同じ感想でありますので、ここでご披露させて頂きたいと思います。

小西芳之助先生20周年記念会感話

山口 周三

昭和56年9月に発行されました「小西芳之助先生余芳」の中に、モーク先生の後任の宣教師であったエルマー先生の短文が収められています。それによれば「小西先生は、天にある住み家の電話局を通して、先生の喜びのメッセージを送り続けることでありましょう。」とあります。

今日は、逆に天におられる小西先生に対して大勢の方がメッセージを送り続けておられる集まりです。

私は祈りは、天にいる人々への電話だと思っていますが、小西先生に毎日感謝の祈りをささげ、電話をされている方々は大勢おられると思います。

小西先生の称名「我が主イエスよ」と呼ぶことは、毎日、いつでも、どこでも、どんな境遇にあってもできる行です。小西先生は、私たちの心はゆれ動くし、悩むから、信仰を称名という行により、身体で覚えさせようとされたのだと思います。

内村鑑三先生の昭和3年の日記によれば「世界の三大人物と言えどどう見てもソクラテスとパウロとカントである」とありましたので、最近一寸カントの本を読んでみましたら、カントの思想のエッセンスと思われる断言命法に、「あなたの格率(行動の指針)が、常に

同時に普遍的立法の原理として通用することができるように行為しなさい。」とあります。カントは、普遍的なものが大切であると言っていると思います。

いつでも、どこでも、誰でもできる行は、普遍的であり、非常に大切だと思われれます。特に、宗教はいろいろな事情で必要とされますから、普遍性が特に大切だと思います。称名という、普遍的に通用する行を見つけ、教えて下さった小西先生に、感謝したいと思います。称名は、あまりに普遍的でありすぎるために、その重要性をみんな見逃してきたのだと思います。

小西先生の本「主の御名を呼ぶ」は石館基さんが1人で、数年前に着手され、小西先生のマンスリー「よろこび」の巻頭言をパソコンで写し、記念会に間に合うように作られた本ですが、私の一読した感想として、小西先生の教えのエッセンスがぎっしりつまっている素晴らしい本です。

こういう一日一題の本は、「霊想の書」とか「デボーションの本」と言われ、素晴らしい本が多く、私は大好きな本の分野ですが、中でも有名なのが次のような本です。

内村鑑三先生の「一日一生」「続一日一生」

ス波尔ジョンの「朝ごとに」

カウマン夫人の「荒野の泉」

などがあります。

小西先生の本は英和対称になっていることは、類書になく素晴らしく、きれいな英文とピシッとした格調高い日本文です。石館基さんによれば、小西先生は、英文を先に書かれ、日本文をあとで書かれたということです。

小西先生の昇天後20年も経って、今日集まった私たちは、共に学び、共に励み、天国で小西先生と相見ることになりたいと思います。

(平成12年4月22日)